SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

山本義彦著『清沢洌の政治経済思想 近代日本の自由主義と国際平和』

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文学部 公開日: 2012-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 恭彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006792

書　評

山本義彦著『清沢洌の政治経済思想近代日本の自由主義と国際平和』(御茶の水書房 1996 年)

伊　藤　恭　彦

1．はじめに

久々に読みごたえのある研究書にであった。その読後の充実感は、葬送行進曲にはじまり、ゆるやかなアダージョを経て、華やかなロンドに終わるマーラーの交響曲第5番を聴き終えたあとの充実感に似ている。昨年の春（1996年2月）出版された山本義彦著『清沢洌の政治経済思想　近代日本の自由主義と国際平和』(御茶の水書房)はそんな充実感をもたらす本である。

以下ではその充実感から端をはっした私の思索のいくつかを紹介し、本書の書評としたい。私の思索はもとより私の専門分野（政治学、より限定的に現代政治哲学）の中でのもので、内容豊かな本書を総合的に評価することはできないし、本書に対する思わぬ誤解があるかもしれない。したがって、清沢洌の思想に含まれる、国際関係論的議論や経済政策的議論等については、全く思索の外におかれてしまうことになる。私の思索の主題は清沢洌の自由主義思想を現代の視点からみて、どのように考えるのかの一点につきると言ってよい。

2．本書の意義

まず本書の意義を私なりに三点に整理してみたい。

第一は、本書のもつ現代的意義についてである。戦後、アメリカの「核の傘」の庇護の下、経済成長を経た日本は、ここ数年のアメリカの地位低下と経済のグローバル化の中で、対外構想(外交ヴィジョン）を真剣に考えなければならない局面に立たされている。単純なアメリカ追随外交ではもはや未曾有の国際化に対応できないのである。この国際化への対応が、例えば「国際貢献論」とか「安保再定義」とか「国連安保理常任理事国入り」といった言葉で議論されているのである。悲しむべきことに、このような議論が今のところ、政争の一部とされ、国際化にふさわしい、外交姿勢のヴァージョン・アップや国民の国際感覚の陶冶にはつながっていない。国際化への対応を思想的に検討する場合、避けて通ることのできない課題の一つは、我々自身の国際感覚の反省と過去の日本の国際感覚の批判的検討である。とりわけ、近代日本において、日本の対外構想を真剣に考え抜いた知的遺産との対話は緊急の課題であると考えられる。過去の対外構想の積極面のみならずその否定的側面をも正当に評価することが、我々の現在の思想的課題を明瞭にすることにつながる。本書はその点で戦間期から第二次大戦まで、一貫して「国際協調」路線を模索した清沢洌の思想の全体像を提示することを意図しており、我々の現在の思想的課題にストレートにつながる意義があると考えられる(1)。

第二は現代政治哲学上の意義である。周知のように、現在、内外で自由主義（リベラリズム）をめぐる議論が活発に展開されている。欧米ではロールズの『正義論』の出版を契機として規範的政治理論が復権したが、その分野での論点の一つは自由主義の新たな基礎の解明にある。わが国においても、海外の新しい議論の摂取は旺盛になされ、さらに喜ばしいことに、これらの摂取が、現代日本がかかえる具体的な問題とからむ形でスリリングな議論へと展開している。すなわち、日本の具体的な問題に即して、日本における自由主義の課題が積極的に提示されはじめているのである(2)。しかしながら、自由主義が日本における焦眉の思想課題であるにもかかわらず、ここでも過去の日本の自由主義思想の批判的検討は十分になさ

れていない。海外での新しい知見の摂取と同時に、わが国の過去の自由主義思想の検討も必須の学問的課題である。そのように考えると、本書が従来あまり正当に評価されないか、または無視されてきた清沢洌の自由主義思想を丹念に描いた意義は、現代政治哲学の課題との関係でもきわめて意義深いものと言えよう。本書を契機として、自由主義をめぐる議論がさらに深化することが期待される。

第3の意義は、本書の方法についてである。今日、思想分析や思想史の方法についての議論も活発である。本書では何か新しい思想分析の方法が導入されているわけではない。とられている方法は、経済史家らしいきわめてオーソドックスな実証的な分析である。思想の実証的分析とでも言える方法が、本書の特色である。清沢洌の作品を丹念に読み、それを絶えず、彼が直面した現実の中に位置づけるという方法は、清沢洌がジャーナリストであったがために、きわめて有効である。ジャーナリスト分析のオーソドックスな方法が見事に成功した例と言えよう。

3．清沢洌はいかなる自由主義者か？

以上のような本書の意義をふまえて、以下では本書に端をはっした私の思索のいくつかを、本書に対する疑問という形で提示してみたい。

第一の疑問は、本書において、清沢洌を「自由主義」思想と規定する根拠づけがやや整理されておらず、誤解をまねくのではないか、ということである。清沢洌は確かにくりかえし自らのことを「自由主義者」と規定している。本人がそう言ったことは、もちろん本人を自由主義と規定する根拠にはならない。根拠はあくまでも、思想に内在して求められねばならない。本書では、もちろん原典に即して丹念に清沢洌を自由主義者と規定しようとしている。しかし、自由主義一般というのはおそらくありえない（同じリベラリズムと言っても重商主義段階のロックのそれと資本主義の本格的確立＝危機と大衆民主主義段階のミルのそれが異なるように）。清沢洌がいかなる自由主義なのか、という観点で本書を読んでみると、ななかな統一した像を結ばないのである。

そこで、本書で清沢洌を「自由主義」と規定している代表的な叙述を5つの点からまず整理してみたい（引用直後に本書頁数を示した。なお、〔　〕は清沢洌の原典からの引用である）。

第一はいわば認識論レヴェルでの規定である。

「清沢の自由主義は、彼自身が語るように、『フレイム・オブ・マインド』、『心的態度』としての自由主義であり、硬直的な教条を排除し、一元的発想（価値観の押しつけ）を断固拒否する、『しなやかな自由主義』とも言うべきもの」（6）

「一方的に現存のブルジョア国家、ブルジョアジーの否定という、決めつけが行われ、相対主義的認識が否定されるという点に、清沢が賛同しえない」（7）

〔「自由主義者にはあらゆるものが相対的です」〕（7）

「左翼も右翼の思想も表面的には反対の主張をしているように見えるが、いずれも『極端主義』という点で、共通の質をもつというのである。この両者の『極端』に対峙しているのは、自由主義であるという」(110)

「清沢の場合は、これとは異質であるが、とは言え、少数者支配の論理と多数者支配の論理を、共に『専制』として認識していたのは、相対主義的認識方法のしからしむるところとも言えよう」(119)

「しかもその認識を支える社会科学的基礎にレーニンの過渡期認識が色濃く投影しているところに、彼の率直かつ大胆な自由主義者としての姿勢を窺うことは容易であろう。当時の言論界は、すでに左翼弾圧を経験していたという事態に即して考えてみるとき、しかも彼は定職を持たぬフリーランサーであるという現実を考慮した場合、その剛胆な自由主義としてのあり方をを改めて確認することができよう。『Frame of Mind としての自由主義』という表現をもって、彼は自己の立場をしばしば表現しているが、多元主義的価値観というそのあり方が、こうした社会主義論に対しても寛容かつ大胆な取り込みを可能としたのであった」(229)

「実はあらゆる権威的価値を容認し得ない彼一流の何事にも囚われない自由主義の立場」〔「断定に臆病なる一個の自由主義者」〕

〔「この世の中に絶対的に正しいということがあ

りうるのか」〕
「愛国主義、あるいは愛国的感情を固定的に一義的に捉えず、多様な意識が存在し、それらを認めつつ、自己の主張を展開することの必要を提起している」(233)
「人はおうおうにして共産主義・社会主義と自由主義（リベラリズム）とを同次元で語るが、それは誤りであって、後者は物事への思考様式を、前者は政策手段を示すというのが彼の議論である」(244)
「こうしてイデオロギーを超えてフリーな立場に立つフリー・インテレクチュアリズムともいうべき内容を、清沢はその立脚点とする」(245)

第二は個人主義と個性や自由の尊重という観点からの規定である。
「二三歳という年齢を考慮しても、個人主義、個人の尊厳を守ることの重要性、これこそ社会進歩の原動力とみるあたりはのちの自由主義の主張につながるものとして注目される」(42)
「以上が、この書冒頭の『服従性の反逆』に主張されたところの内容である。極めて明確な戦闘的デモクラットと規定してよいのではないだろうか。しかもその視点は人間の自由をいかに確保するかというところにある。その点ではまさに徹頭徹尾の自由主義者である」(118)
「何よりも教育の視点を個人の解放＝個性の発揮、それを可能にする『自由』の保障、国家からの人々の解放、社会人としての人格の陶冶を強調する」(123)

第三は少数者尊重という観点からの規定である。
「清沢洌の自由主義思想がどのように形成されていったのか、という点を考えるにさいして、私にとって気がかりの一つは、ここに清沢が自己認識した『小生は消極的人物』ということである。強者＝権力者風の発想ではなく、自己の人間的弱さを意識しうるものこそ、同時に他者への深い思いやり、を包含しうるということを顧慮するならば、この視点は、自由主義の心情的源泉として理解されうる」(46)
「こうした相対化の視点こそが常に少数者の見解の重視を彼に植え付けてきたのではないだろうか」(243)

第四は 20 世紀的＝福祉国家的自由主義という規定である。
「国家による資本抑制の必要を承認する新自由主義と自由主義を基調とする労働党との間に大きな差はない、と見ている」(134)
「自由主義が自由を強調するだけで社会的正義が達成可能であった時代はすでに過ぎ去っていて、現状では、自由主義であることと、経済的平等性との関係は解体していて、それ故に彼は、自由主義者として、同時に経済制度として社会主義を主張するというのである。また自由主義とは考え方を意味するのであって、しかもそれはプロテスト、抵抗の思想であるという」(231)
「彼の主張する『自由主義』は一般に解されているような『経済的自由主義』＝資本主義弁護論ではないことを強調している。いわば政治的自由主義の立場である。資本主義は克服対象であると理解している」(266－7)

第五は社会発展という観点からの規定である。
「こうして『中庸的進歩主義』－これこそが清沢の自由主義を起点とする社会発展への見方である」(266)
「個人の利益を追求することではなく、社会の利益のために生きること、そしてその方向で個人の利益は二義的な位置に置かれるべきことを、彼は理想としているのである」(270)

本書における清沢洌＝自由主義という規定のうち、代表的と思われる叙述を挙げてみた。それぞれの箇所は清沢洌の原典に基づいて提示されているが故に、それなりに説得的ではあるが、統一した清沢洌の自由主義像が浮かびにくい。さらに第一の相対主義的認識に関してはやや問題があるように思える。つまり、相対主義が自由主義と等置されているかの印象を与えるからだ。確かに資本主義にも社会主義にも距離をおくというある種の相対的認識が彼の強靱なジャーナリスト魂を支えていたとは考えられる。しかし、相対主義があたかも自由主義と等置されるかの印象を与えてしまう。相対主義の立場に立てば、彼が最も基礎においた自由や個性という価値もまた相対化されてし

まうかもしれない。その点で清沢洌の自由主義を相対主義によって基礎づけることはきわめて困難である。であるなら、清沢洌を自由主義と規定する別の根拠が求められねばならない。

本書を読む中で私なりに考えたことは次のような自由主義像である。清沢洌の最も基本的な価値は個性の尊重ということだと思われる。個性の尊重が最大限保障されるために、例えば、柔軟な認識方法としての相対的認識や、「経済制度としての社会主義」が擁護されたのではないだろうか。つまり、清沢洌は相対主義者なのではなく、個性の尊重という特定の価値の選び取りをしているわけである。もちろん、清沢洌はかかる価値の選び取りのために、あらゆる教条を排し、あらゆる思想（日本の伝統思想、キリスト教、マルクス主義等）をいったん相対化しているのである。他方で、「この世の中に絶対的に正しいということがありうるのか」という清沢洌の発言は、実際に個性が尊重され、その陶冶が可能のなる社会条件としての価値プルーラリズムの擁護へともつながっているのである。つまり、清沢洌にとっての相対主義は、一方で自らの思想形成の一手段として、他方で、形成された思想の中核＝個性の尊重が具体的に開花されるための社会条件として、二重の意味をもっていると考えられる。

仮に個性の尊重ということが清沢洌の自由主義の中核に位置する価値であるという捉え方が正しいならば、これは19世紀ヨーロッパ自由主義にも匹敵する、斬新な自由主義思想と言えよう。周知のように個性の尊重を自由主義社会の基底に据えたのは、ヨーロッパではJ.S.ミルである。ミルは次のように述べる。「個性の自由な発展が、幸福の主要な要素の一つであるということが、痛感されているならば、また、それは文明、知識、教育、教養というような言葉によって意味されている一切のものと同位の要素であるに止まらず、それ自体がこれらのすべてのものの必須の要素であり条件である、ということが痛感されているならば、自由の軽視される危険性は存在せず、また自由と社会による統制との境界を調整することについても、特別の困難を惹起しないであろう」(3)。ミルの自由主義と清沢洌の自由主義を機械的に等置することはできない。しかし、ミルが大衆社会的状況（「多数者の暴虐」）の中、その批判原理として「個性」を導入したことと、清沢洌が日本的同質性社会の批判原理として「個性の尊重」を主張したことは、比較政治思想史的な観点からも興味深い問題を提起するだろう。このような観点を深化させるならば、日本的な自由主義の特質を解明できるかもしれない。そして、おそらく清沢洌の場合、資本主義の19世紀的危機ではなく、20世紀的な危機認識があり、同じく「個性の尊重」を基底にしながらも、「経済制度としての社会主義の擁護」へと清沢洌を向かわせたのであろう。すなわち、個性が尊重される社会経済的条件の確保と維持のための積極的な計画と介入政策（「国家による資本の抑制」）の提唱という清沢洌の経済政策上のスタンスが形成されたのであろう。

4．清沢洌と現代日本に思想課題

以上のように、清沢洌の自由主義はヨーロッパの20世紀的自由主義の転換にも匹敵する、普遍的な意義をもった思想と捉えることができる。そのような意義を確認した上で、以下でもう一点、私の思索の一端を述べたい。それは、いわば清沢洌思想の日本的特質＝限界に関連するものである。

本書においては、清沢洌がもつ積極的な意義が確認されると同時に、その思想的限界についても正確な把握がなされている。清沢洌の限界とは、例えば、経済帝国主義、天皇認識、他文明蔑視等に現れている。その代表的な叙述をいくつか挙げてみたい。

「清沢の考え方の中には、『開発が平和的である』こと、つまり経済ベースで行われるならば、それは承認されるべきだという立場がある」(82)

「そこには経済的帝国主義論とでも呼ぶべき論理が貫かれており、後発帝国主義としての位置を有する日本の特殊性への理解＝容認がみられるといってよいであろう」(85)

「こうした『黒人文明』の評価に関しては、それを低位のものと捉えており、逆に清沢のような諸国民のあり方に対する相対主義的認識を貫徹させている人格にあっても、時代の制約、欧米文化や日本のそれへの無前提の高い位置におくことの躊躇は見られなかった」(192)

「ここには一面で、清沢は祖国の発展膨張を願うナショナリストであるが、他面ではその実現に当

たっては、あくまでも国際平和の枠組みを基礎とすべきであるとの見解を堅持」(241)

「清沢洌にとって、天皇は崇敬の対象であった。しかしそれは無条件ではない。君臨すれども統治せずといったイギリス型を是認したかという疑問もある（むろんイギリス君主制をこのように一面的理解に止めてはならないことは自明である)。明治天皇を『明治大帝』と呼称しており、その偉大さをたたえることに惜しみはなかった。ではそれはどういうことか。彼にとって明治天皇は伊藤博文らの周囲の人々が賢明であって、彼らをうまく活用した功績が称賛の基礎にある。この点では、同時代人としての昭和天皇について厳しい。というのは側近の資質の反動性、好戦性、軍部へのへつらいによって天皇が称賛すべき活動を示さなかったところにある。」(404)

これらの清沢洌の思想がもつ限界について、本書では明確にその問題性が指摘されている。しかし、この時代に類い希な日本社会批判や国際協調論を展開した進歩的知識人＝清沢洌がなぜこのような問題を含まざるをえなかったのかについて、本書では「権力への配慮」や「時代的制約」にその理由が求められている。そのような理由があったことを否定するつもりはないが、清沢洌の内面に入り、積極的思想がなぜかかる問題を引きずらざるをえなかったのかを、思想の構造的解明という形で提示する必要があったのではないかと思われる。そのような思想の構造的解明がなされなかったのは、前述の本書の方法、つまり思想の実証研究にその原因の一部がある。清沢洌の思想をたえず時代の文脈において理解することが本書のきわだった特色であり、強みであるが、思想の問題性解明という点では、その強みが発揮できないのではないだろうか。

このように清沢洌の思想の問題性を強調することは、彼を現時点から断罪するためではない。アジアへの「経済帝国主義」的進出や他民族（とりわけアジアの民族）への蔑視、さらには天皇問題を意図的に放置する「自由」論議等、現在われわれの生と思想は相当の問題をはらんでいる。他方で、積極的な平和思考や人権擁護等、戦後我々が培ってきた積極的遺産も存在する。だとすると、考えられる清沢洌の思想的限界は、実は現在の我々の思想的限界＝課題でもある。そのような現在の日本の思想的課題を考えるならば、清沢洌の積極性と問題性の思想に即しての構造的解明は急務のことと思われる。そして、そのことは我々自身の内面にメスを入れることでもある。

5．おわりに

限られた角度からではあるが、本書の意義と私の思索の一部を述べてきた。私が十分に納得できなかった点を全面に出した書評となったが、これらは本書の意義を何ら貶めるものではない。21 世紀に向けて日本社会を批判的に検討したり、日本の国際社会での在り方を真剣に考える人にとっては、恰好の研究書でありることは強調しても強調し過ぎることはないであろう。多くの人々が本書をひもとくことを期待したい。

（1） 戦間期の日本の政治家の対外構想を検討したものとして、川田稔『原敬　転換期の思想－国際社会と日本』（未来社　1995 年）がある。本書との関係でも併読されるべきである。

（2） その最良の成果として、井上達夫や藤原保信の議論が挙げられるだろう。例えば、井上達夫『共生の作法　会話としての正義』（創文社　1986 年)、藤原保信『自由主義の再検討』（岩波新書　1993 年）を参照。

（3） ミル『自由論』（岩波文庫　117 頁）

付記

私のような浅学の者に、書評をお許し下さった、著者の山本義彦先生に御礼申し上げたい。また、本論は静岡大学人文学部の経済研究会（96 年 7 月 4 日）での報告に加筆、訂正したものである。報告の機会を与えて下さった経済研究会の諸先生方、また、当日、私といっしょに報告をなさった黒川みどり先生（静岡大学教育学部）にも御礼申し上げたい。